2016
J・A・C
秋田山岳
平成28年4月　発行
No.　100
公社団法人 日本山岳会秋田支部
秋田市泉菅野
1-2-14　鈴木方
TEL・FAX018(823)2708
発行者　今野昌雄
編集者　鈴木裕子

「秋田山岳」第100号発行

「秋田山岳」第一〇〇号発行にあたって

支部長　今野昌雄

秋田支部会報は昭和三十四年七月二十日に第一号、十月に第二号が発行されました。

その後、昭和四十一年に第三号から五号を発行、その後は諸般の事情により発行されず、昭和五十八年一月に第六号が発行されてからは、現在まで毎年順調に発行（年一～四回のペース）され、この度は記念すべき第一〇〇号発行の運びとなりました。

この支部会報「秋田山岳」は、第一巻、第二巻の二冊の会報合本となり、設立四十周年記念誌、五十周年記念誌と共に、秋田支部の現在までの活動を網羅した、極めて貴重な資料・財産であります。

編集者は保坂隆司（当時常務委員、現名誉顧問）、故佐藤兼司（当時常務委員、元支部長）、佐々木民秀（当時常務委員、前支部長・現顧問）、佐藤税（当時委員）、鈴木裕子（事務局長、副支部長）の各氏です。

中でも、昭和五十八年から平成十三年の長期間担当された支部顧問佐々木民秀氏の「会報は支部の顔であり心臓である」との編集方針は、現在も引き継がれております。

会報発行の歴史等については、四十周年記念誌に佐々木民秀氏、五十周年記念誌に鈴木裕子氏が「あとがき」で記しています。

パソコンになってからの原稿入力は鈴木裕子事務局長が引き受けて進めてきました。

今号は、これまで編集に携わった方々に当時の苦労話などをご執筆いただきました。第一号から現在まで編集に携わった各氏のご尽力には深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

今年はマナスル初登頂から六〇年、国民の祝日として「山の日」施行の年であり、東北・北海道地区集会は秋田支部主管で、森吉山域を予定しております。

ここにめでたく秋田支部会報第一〇〇号の発刊をみたのも、日頃の支部会員の支援によるものであります。

今後も仲間を増やしながら、情報交換や交流、記録を通して安全で楽しい山行ができるように充実した支部会報の発行を心がけたく、一層のご指導、ご協力お願い申し上げます。

第95号　　第6号　　第1号

「秋田山岳」合本　第2巻　第1巻

秋田支部設立のもたらしたもの

支部名誉顧問　保坂隆司

この度、日本山岳会秋田支部の支部報として発行されてきた「秋田山岳」が、大きな節目となる第一〇〇号を迎えられるとのこと、設立会員のひとりとして誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げる次第である。

顧みれば私は、秋田県山岳連盟（以下「秋田岳連」という。会長は、のちの当支部初代支部長となる荒巻廣政氏）の常務理事として、昭和三十六年秋に開催予定の第十六回秋田国体登山の受け入れ準備に駆けずり廻っていたのであるが、当時の国体登山の実施主体は日本体育協会（以下「日体協」という）に戦後間もなく加盟している日本山岳会（以下「本会」という）であったため、各都道府県山岳連盟で組織されていた全日本山岳連盟（以下「全岳連」という）は、その強い要請にもかかわらず、国体登山の実施主体とはなれなかったのである。従って、秋田国体登山の準備運営に少なからず支障をきたしていたのであった。

そこで荒巻会長は、かねてからの願望でもあった「秋田にも、もうひとつアカデミックな山の会を作りたい」ということと併せて、せまりくる秋田国体登山の準備運営の円滑化を図るために、本会の支部設立の意志を固められ、県内会員（当時七名）との連携と新規会員の勧誘に努められたのであった。

かくして当支部は、三田幸夫本会副会長ほか来賓各位のご出席のもと、昭和三十四年六月二十八日、秋田魁新報社講堂において設立総会を開き、設立会員二十六名をもって全国十五番目の支部として発足したのである。

一方、全岳連からの強い要請を受けていた日体協は、本会と全岳連の双方からなる日本山岳協会（以下「日山協」という）を組織して日体協に加盟する方法があると示唆、本会は急遽支部長会議を開いてこれを審議可決したのであった。

日山協は、本会と全岳連の双方から五名ずつの役員をもって運営し、海外登山は経験をもつ本会が担当、国体登山や国内行事の世話は組織をもつ全岳連が担当という分掌が定められ、翌三十五年四月一日付けで日体協の加盟団体となったのである。

従って、これまで続けこられた国体登山の実施主体をめぐるいざこざは、当支部の設立を最後に終息したのである。

ちなみに日山協は、その後全岳連の加盟団体（各都道府県岳連）と事業等の全部を引継ぎ、法人化のための設立総会を同四十二年五月に開き、現在に至るのである。

「秋田山岳」第一〇〇号発行を祝う

元発行・編集人　支部顧問　佐々木民秀

秋田支部報「秋田山岳」は、今号をもって記念すべき第一〇〇号を発行するに至った。誠にお目出度いことであり心からお祝い申し上げます。

顧みるに、岡田光行第三代秋田支部長のもとに常務委員として支部報を担当し、それまで長らく絶えていた支部報の復活を担い、昭和五十八年に第六号を発行。以来、途切れることなく、脈々と号数を重ねる事が出来たのは、一重に、支部会員の協力があってこそであり、新ためて感謝の意を表しておきたい。と同時に、支部報の発行に長年携わって来た関係上、特に感無量のものがあり、その達成感の境地に浸らせて頂いているところでもあります。

第六号の発行当初は、予算はなく、年一回程度が限界であったが、そのために掲載内容を特に制限し、支部と本会に関るもののみを主体として纏めてきた次第である。

従って、経過年数に対しての号数が以外にも少ないのはやむを得ない。

以後、予算に余裕が出来、年三回程度の発行が可能となったが、その掲載内容はこれまで通り変更せず、将来に渡って支部報を見るだけで、その時代時代の支部活動の記録や諸議事録などが取りこぼし無く、一目で判るように編集されてきており、これまでの周年記念誌などの作成に大いに役立たせてきたことは周知の通りである。

なお、支部報第五〇号発行の際の記事と重複して恐縮ですが、その意義として「支部報は支部の顔であり、心臓部でもある。その役割は重要であり、会員間のコミュニケーションに大きな役割を果たして…云々」と記しているが、これをモットーに継承され、そしてカラー化するなど、編集に尽力されている現編集子に、心から敬意と感謝申し上げておきたい。

最後に、支部会員を始め、関係各位の皆さんの更なるご協力をもって、次の大節目、第一五〇号へと発展的に繋がってゆくことを切に願ってお祝いの言葉と致します。

（永年会員）

つまり、当支部の設立は、本会を伝統と山岳文化を重んじ、登山技術の向上を図るアカデミックな山岳会へと純化させる効果をもたらしたと同時に、国体や山岳遭難防止等の行事や事業に特化する日山協の創立へと導くきっかけをつくったと云えるのである。

支部報第一号、二号の編集を担当した者として、当時を振り返り、改めて第一〇〇号の発行を心からお祝い申し上げる次第である。

（永年会員）

第一〇〇号発行

編集人　鈴木裕子

私は、平成十七年六月発行の「第六十三号」から編集を担当しているが、たまたま未熟ながらもパソコンの操作ができる、ということで担当に指名されたらしい。

支部設立五十周年記念の「秋田山岳」合本にも記したが、会報表紙の山なみは保坂隆司氏がイメージした霊峰・太平山であり、「秋田山岳」の題字は、故岡田光行第三代支部長の書で、この書は合本第一巻、第二巻の題字でもある。

昭和三十四年七月、支部設立の翌月に、第一号がガリ版刷りで発行され、今回一〇〇号の発行となる。これまでの経緯は合本一号、二号に記載されているので省略させていただく。

編集では、せっかくの原稿や寄稿を紙面に合わせて加筆や削除をすることが悩みである。寄稿者の思いを損なわないようにと気がかりである。

また、全ての会務の報告が事務局に連絡があるとは限らないので、支部会員が参加したと思われる会務の情報収集に苦心する。

何度も何度も目を通したはずなのに、出来上がった会報に誤字、脱字を見つけると落ち込む。パソコンを睨んで割付を考え、一字多い、少ない、写真の色合いは綺麗か、出来上がるまでの苦心もあるが、会員の方々に喜んでいただけるのが何より嬉しく、記念すべき第一〇〇号の編集が出来た事を喜びに思っています。

平成二十八年度　支部総会開催

平成二十八年度秋田支部総会は、四月二日午前十一時から、秋田市の「協働大町ビル」において開催された。

総会に先立ち、昨年逝去した故大山健助会員への黙祷の後、鈴木（裕）副支部長の進行で始まり、会員総数五十九名、出席会員二十五名、委任状提出会員二十七名を確認。

はじめに、今野支部長から、支部運営の協力に感謝し、本年は森吉での集会がある、人との交流を大事にし、体力に応じて楽しみ、思い出に残る集会にしたい、と協力をお願いする旨の挨拶があった。

続いて、三浦眞六委員を議長に指名して、案件の審議が行われた。

案件一　平成二十七年度の事業について鈴木（裕）副支部長が報告。

昨年度は、明田冨士山山頂部に設置されているベンチの補修を行い、お花見会を行ったことや、春・秋の支部山行、公益的事業として太平山中岳周辺や歩道の一部の刈り払い、太平山山開き市民登山への協力を行った。また、森吉集会について三浦委員からこれまでの経緯の説明があった。

会報の発行は三回、支部長会議、支部担当者会議、東北・北海道地区集会や、日本山岳会創立一一〇周年記念式典の出席等の報告。

案件二　平成二十六年度収支決算について、石川会計担当委員が報告。高橋会計監事から、四月一日、秋田市のアルヴェ市民交流室において行われた会計監査の結果、関係書類が適正に処理されていることが報告され、事業及び決算は承認された。

案件三　平成二十八年度事業計画は、鎌田委員から春秋の山行について、藤田委員から山の日に関する支部の対応について、県・自然保護課の歩道整備等にボランテイアとして参加する案等の説明があった。

森吉集会は、現在支部参加者二十二名、他支部から二十六名の参加申し込みがあり、目標の八十名は見込まれる。

案件四　平成二十八年度予算案について石川会計担当委員から、支部会費、本会の助成金・補助金の減額等について説明。事業計画、予算案ともに承認された。

寺田会員からは、本会からの補助金も減額され、支部財政が厳しいことから次年度に支部会費を五百円増額し、二千円としては如何かと提案され、会員に周知し、二十九年度には値上げすることで承認された。

案件五　役員改選については、本年は森吉集会の主管であり、既に現委員で準備を行っているので、引き続き現委員の留任を承認。欠員の監事には柴田勧会員を選任し、承認された。

総会は正午頃終了し、平成元年に「明田冨士山」を案内する故岡田支部長の懐かしいラジオ放送が披露された。

懇親会は、進藤名誉顧問の発声で開催。旭日双光章を受賞した高橋守会員からのお話や、山情報の交換等で会員相互の交流を深め、午後二時頃、寺田会員のお開きの乾杯で散会した。

御芳志　厚くお礼申し上げます。

五千五百円　鈴木要三

五千円　進藤　昭　安藤武俊　佐々木民秀　佐藤昭義　今野昌雄

四千五百円　長岩嘉悦

四千円　鈴木裕子

二千円　柳田勇悦

出席者　進藤　昭　佐々木民秀　福田光子　高橋　守　今野昌雄　柳田勇悦　鈴木裕子　堀井　弘　鎌田倫夫　佐藤　博　高橋忠雄　寺田新一　川口廣志　大橋忠雄　石川祐子　柴田　勧　三浦眞六　佐々木長秀　佐々木悦子　安藤金栄　熊谷光子　高橋洋二　藤田正義　澤田石一夫　佐藤英實　懇親会のみ　小笠原義雄

全国支部懇談会と弥彦山の山旅

佐々木　長　秀

第三十二回全国支部懇談会が、四月九日・十日に開催された。会場となった新潟県の岩室温泉は、北陸自動車道巻潟東ICから車で約三十分、弥彦山に続く多宝山の麓にあり、三百年の歴史を有する温泉地である。参加者は、北海道支部から宮崎支部まで、二五三名。秋田からは四名の参加であった。

一日目の全体集会では、「弥彦山の植生」、石澤進氏（元新潟大学教授）と、「山・人・酒」、平田大六氏（元越後支部長）の講演があった。特に、石澤氏からは「弥彦山は日本海に面した独立の山塊であることから、多種多様な植物が分布している。しかし、長い間調査してきたユキツバキとヤブツバキの分布の変化が、自然環境の変化に要因があるのではないかと思う」との指摘は、私たちの今後の自然保護運動の視点を示していて、共感を覚えた。

また、日本山岳会伝統の大交流会は、酒の国での山仲間の交流にふさわしく、一升ビンを各テーブルに立てての酒宴であった。アトラクションの新潟民謡が始まるとさらに盛り上がり、「二次会」まで、延々と続いた。

二日目の早朝、館内放送があり、「緊急集会」が召集される。越後支部長から「参加者の一人が浴場で倒れ、その後死亡された。残念ではあるが、この集会を区切りに全国支部懇談会を終了したい。」と説明があった。越後支部のこの判断を妥当なものとし、全員が起立して黙祷を捧げる。秋田支部は、他の支部と話し合い、「自主的な山行」をすることに決めた。

他支部の方々と共に、弥彦山の中で最も山野草が多い「八枚沢コース」を登ることとなった。小さな滝のある沢を渡ると、すぐに急登が始まる（八時三十分）。登りの連続で汗が出て来た頃、それを癒すように雪割草・カタクリ・キクザキ一輪草などが咲乱れていた。

妻戸尾根は日当たりのいい尾根で、右には新潟平野が、左には寺泊の町並みを見ることができる。また登山道の両側にカタクリの大群生地が続く。越後支部の皆さんが着ているTシャツの色が、このカタクリの花の色であることに納得した。

二等三角点のある妻戸山（五八五、六m）に到着（十時）。ここからは緩やかな登りとなり、上の方から観光客の賑やかな声が聞こえて来る。階段状に整備された散策路を進むと、弥彦山（六三四m）の頂上だ（十時三十分）。

ここに越後一ノ宮・弥彦神社の奥ノ院がある。佐渡ヶ島の眺望を期待していたが、春霞のため残念ながら実現できなかった。

少し下り、茶屋の前で昼食をとった後に、大平山公園に向かう（十一時三十分）。ここに、もう一つの目的である、「高頭仁兵衛氏」の大きな岩にはめ込まれたレリーフがあった。日本山岳会創設時の発起人の一人であり、二代目会長でもある。毎年七月二十五日に越後支部が主催する「高頭祭」が開催されていると言う。

秋田支部の四人は、更に多宝山（六三二、八m）を往復（約一時間）する。弥彦山の方が高いが、ご神体のため三角点を設置できず、多宝山の頂上に、一等三角点（点名・弥彦山）が設置されていた。

今集会は、当初計画の一部変更を余儀なくされたとは言え、支部結成七十年を迎えた越後支部の歴史に学び、秋田より一足早く、早春の花々に触れることができ、すばらしい二日間だったと思っている。

参加者　今野昌雄　福田光子
鈴木裕子　佐々木長秀

支部会員の動向

退会　大里祐一（二十八年三月）
川島由夫（二十八年三月）

会務報告

◎東北・北海道地区集会役員会

一月二十一日、午前十時から泉コミセンで開催。

・各支部に発送するご案内文書、会報「山」への掲載依頼等を協議・検討

出席者　今野昌雄　三浦眞六
鈴木裕子　佐々木長秀

◎役員会

二月十五日、午前九時から泉コミセンで開催

・二十八年度支部総会に提出する案件を協議。

・東北・北海道地区集会では、参加支部会員に一人一役をお願いする。

・役員改選については、二十八年度に東北・北海道地区集会の開催地であり、現役員で開会の準備をしていることから、引き続きご協力を願うこととして留任とし、欠員となっている監事の選任のみとした。

出席者　今野昌雄　鈴木裕子　鎌田倫夫
佐藤博　石川祐子　三浦眞六
安藤金栄　佐々木長秀　藤田正義
高橋忠雄

◎会計監査

四月一日、午後二時からアルヴェ市民交流室で、二十七年度会計決算監査を実施。

出席者　高橋忠雄　柴田勧
鈴木裕子　石川祐子